（現在のＮＨＫ）初代英語講座講師」「『新英和大辞典』（研究者）」「『英文学叢書』一〇〇巻（市河三喜と共編）」などで知られている。しかし、本来の出発点は、チェンバレンに学んだ日本語学にある。さらには、英語教師と同時に国語教師でもあったため、初期の頃の著作は日本語学のものである。その後、夏目漱石とともにイギリスに留学し、英語教師に転向していくのだが、その英語教育論の中にも国語教育の重要性を繰り返し説いている。また、ラジオ講座の講師としても著名であり、音声教育に熱心であったが、それは日本語学にも言えることであり、英語教師に転向してからも、日本語の音声などの著作も残している。従来、岡倉由三郎は、日本語学史・国語教育史の中でも、大きくは取り上げられていない。しかし、日本語学者、国語教育者、英語教育者として重要な点を指摘し、日本語と英語の二つの顔を持ちながらその影響を後世に与えた点などを指摘したい。

〈第Ⅱ会場〉

「新しい世代」の〈私小説〉批判
――『１９４６・文学的考察』の問題構成

文学研究科国文学専攻博士前期課程二年　伊豆原潤星

『１９４６・文学的考察』は、加藤周一・中村真一郎・福永武彦の三人が、雑誌『世代』に一九四六年初頭から年末まで「カメラ・アイズ」という表題で連載したものを、翌一九四七年に真善美社から刊行したものである。当時、二七歳前後であった彼らは、戦後の新しい文学は、事実を映しただけの〈私小説〉的小説からではなく、虚構の小説から始まり、その道は世界文学に通じるものであると述べている。『１９４６・文学的考察』は、「「戦後文学」の赫々たるマニフェスト」（篠田一士「解題」〔冨山房百科文庫版『１９４６・文学的考察』所収〕）として機能したと言ってよいだろう。しかし、その主張は、一九三〇年代における小林秀雄らによる論の反復・変形であり、必ずしも新しいものではない。同時代において、彼らの論が広く流布し影響を与えたのは、むしろ、彼らの登場の仕方や訴え方の新しさに求められるのではないか。

これまで、文学史には登録されながらも、『１９４６・文学的考察』は積極的に論じられてこなかった。本発表では、加藤・中村・福永ら三人の「新しい世代」の文学者が戦後文学に与えた影響、また、彼らの〈私小説〉批判の内実について併せて考察していきたい。

大西巨人『地獄篇三部作』の挑戦
――乗り越えの対象としての鏡像――

文学研究科国文学専攻博士前期課程二年　杉山　雄大

大西巨人作『地獄篇三部作』（光文社、二〇〇七年八月初出）の執筆時期は一九四七年の夏から翌年の五月頃までの間であったと考えられる。本発表は『地獄篇三部作』を執筆時期に置き、巨人の創作活動の軌跡や同時代の文脈の中に有機的に位置づける試みである。

『地獄篇三部作』の執筆時期に、巨人は志賀直哉批判を集中的に

書いている。そこで巨人は、小説の本質を事実に対する独立性・仮構性に求め、作中人物＝実在の人物となることが、小説の原理上不可能であることを論じた。巨人によれば、小説において「私怨」を晴らすことは、「その本来の実際において複数」である対象の「集約または代表または表象」たる「単数対象」に「公怨」を晴らすことと同じである。ここには、作中人物を実在する人物の典型・類型と捉え、本質的な関係において実在の人物と作中人物とを対照する思考がある。同時期に書かれた『地獄篇三部作』では、実在の文学者の名をもじった名を持つ人物が多数登場する。これらの作中人物は、実在の人物の類型であるとともに、戯画化された鏡像であり、読む者にその乗り越えを迫る。鏡像を乗り越えるという巨人文芸のモチーフは、巨人の出発期において既に認められるのである。

団地に住まう「火星人」
――安部公房『人間そっくり』の空間――

文学研究科国文学専攻博士前期課程二年　野口　勝輝

安部公房『人間そっくり』は、一九六六年の『S-Fマガジン』（早川書房）九～一一月号に連載された作品である。本作品は「こんにちは火星人」というラジオ番組の脚本を書いているラジオ作家のもとに、火星人を自称する男（以下火星人）が訪ねてくる場面から始まり、火星人とのやりとりを通し、ラジオ作家の現実認識が少しずつ揺らぎ、ついには現実と虚構の区別がつかなくなってしまうまでの過程を描く。舞台としては団地が設定されており、ラジオ作家と火星人とのやりとりは、すべて団地のなかで行われる。また、ラジオ作家、火星人は同じ団地に住んでもいる。そのため、本作品を理解する上で、〈団地〉という空間を無視することはできないだろう。

本作品についての研究は進んでいるとは言えない。また、永野宏志「読者にセットされる異物―安部公房『人間そっくり』に関する覚書（一）」のように同時代における人間観の変容との関連から分析した注目すべき論もあるが、作品内の空間に着目した先行論はまだない。そのため、今回の発表では作品と同時代である一九六〇年代の〈団地〉という観点から作品を読み解いていくことを試みる。

横山秀夫『ロクヨン』に描かれた「組織」と「個人」
――中国の「法制文学」と比較して

文学研究科国文学専攻博士前期課程二年　張　元

横山秀夫は、犯罪捜査を主体とする従来の警察小説に、新しい機軸を開いたミステリー作家である。『ロクヨン』は『別冊文藝春秋』にて、二〇〇四年五月号から二〇〇六年五月号にかけて連載され、二〇一二年十月に単行本として刊行された長編小説である。物語は、D県警広報官三上義信を主人公とし、昭和六四年と作品内現在の平成一四年とに起きた二つの誘拐事件との交差を描いている。警察組織の内側に鋭く切り込んでいるところに特色があり、刑事部と警務